

第7回日本認知症予防学会学術集会 発表

題名；中鎖脂肪酸により食事動作の改善を認めた重度認知症患者の症例

氏名；渡邊慎二¹⁾、大塚由香利²⁾、加藤珠里²⁾、太田敬子²⁾、小川智代²⁾、木村有里²⁾、魚住弥生²⁾、
平田裕子³⁾、吉田弘²⁾

所属；¹⁾日清オイリオグループ株式会社中央研究所、²⁾一般社団法人上川北部医師会 名寄東病院、
³⁾介護老健施設 都築ハートフルステーション

【目的】

意欲や活気を失くし、生活活動動作の一部である食事で、自力摂取量が減少したアルツハイマー型認知症（AD）患者に対し、中鎖脂肪酸（MCF）を含む油を摂取させ、食事の自力摂取に対する影響を検討した。

【方法】

症例1）AD を患う、要介護度 5 の男性入居者（80 歳）に対し、MCF を含む油（日清 MCT オイル、日清オイリオグループ(株)製）5g～10g／日、を毎日食事に混ぜて摂取させた。MCF の前後で認知機能、食事摂取量、自力摂取量、喫食時間、等の評価を行った。症例2）認知症薬投薬中止したAD を患う、食事が全介助の要介護度 3 の女性入居者（90 歳）に対し、メモリオン®（同社製、MCF6g）を1本／日、摂取させた。その時の食事状況の観察を行った。

【結果】

症例1）HDS-R によるテストで一部見当識、計算問題において改善が見られた。また、多弁になり活気が見られた。食事面では、食事摂取量は、MCF 摂取前も全量摂取であったが、全介助から部分介助の日が出現し、自力摂取1割程度から9程度に改善した。また、それに呼応して喫食時間は少し長くなる傾向にあった。2）全介助から部分介助になった。食事を眺めている状態から、時間は要しても、箸でつかみ、口に入れる動作が出来るようになり、スプーンでゼリーを食すことが可能になり、常食に戻った。意味不明の発語が減り、問いに対し、返事を返すようになった。

【考査】

MCF 摂取後、対象患者に再び意欲や活気が戻り、食事の自力摂取度の改善、摂取量の改善、常食への移行が見られた。この自力摂取量増加に伴い、家族や看護スタッフの食事介助の負担が減る可能性が示唆された。